

＜＜特定非営利活動法人鳳雛塾＞＞

ビジネススクールケース教材

学生起業・株式会社 WIDE の挑戦

TOUSU

株式会社 WIDE の概要

株式会社 WIDE はまだ新型コロナウイルス禍の影が残る 2022 年 4 月、佐賀大学教育学部に在学中の北原誠大（以下、敬称略）と高校時代の友人 3 人と共に創業されたスタートアップ起業である。「ブカツ（部活動）の持つポテンシャルを顕在化し、地域に熱狂を生み出す」ことをテーマに、地域で部活動を支え、教師の負担も減らしつつ、子どもの「スポーツ権」を守るために様々なサービスを展開している。

高校時代から大学入学まで

代表取締役を務める北原は、学校教員の両親を持つ一家で生まれ育ち、小・中・高校まで地元佐賀県鹿島市で過ごした。高校に入学すると特に理由もなく何となくサッカー部に入部し、そこで同級生 12 人を含む総部員 30 名と恩師に出会う。本人曰く決して「上手い選手ではなかった」そうだが、サッカーや部活動というものの楽しさを実感し、それが後の起業動機の原点となっている。また大学入学後もサッカー熱は止まず、日本サッカー協会指導者ライセンスのコーチ資格を取得し、実際に高校で指導も行っていった。

高校時代のもう一つの重要な経験として、学校祭があった。日頃授業と部活動で多忙な中、「学校祭くらいは楽しみたい」という思いがあった。ところがいざ学校祭が始まってみると、「誰も楽しませてくれない」想像以上につまらないものに映った。サッカー部でもムードメーカー的な存在であった彼は、翌年の学校祭で盛り上げ役として活躍し、「楽しませる」側に回るという考え方をとるようになる。そしてこの経験もまた起業の動機として、学校の部活動の支援を通じて子どもたちに楽しんでもらいたいという形で残ることになった。

このように北原の高校時代は充実したものであったが、高校 3 年ともなると嫌でも将来のことを考える状況に置かれてしまう。彼も他の同級生と同様に次第に現実味のある未来に向けて行動しようと考えた。両親が教員ということもあり、自分も教員にという思いもありながら、とりあえずは「たくさん勉強していい大学に入れば、良い将来が待っているのでは？」くらいの考えであった。

そして九州大学を受験し不合格だったものの、佐賀大学教育学部に合格し、彼は大学生活をスタートさせた。

思わぬ新型コロナウイルス禍下での大学生生活

2020年1月、世界保健機関（WHO）は、中国は武漢市における肺炎の集団発生が新型コロナウイルスによるものとする声明を出した。これまでの重傷矯正呼吸器症候群（SARS）や中東呼吸器症候群（MERS）などと同様に考えられていたものの、過去にない潜伏性と感染力の強さから、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」を宣言。パンデミック（世界的流行）に対する警戒を表明した。

日本では1月に初の感染者を確認したが、一気に警戒感が増したのは2月に入ってから、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号から香港で下船した乗客が感染していることが判明、横浜港に移動し長期の検疫体制に入ると他の乗客の感染が相次いで判明したことである。2月末には当時の安倍内閣が3月2日から日本全国の小中高校の臨時休校を要請、しかし日本国内の感染の爆発は止まらず、同年夏に予定されていた東京オリンピックは延期、4月には都市部の都府県を中心に緊急事態宣言が出された。その後も飲食店などの感染リスクの高い店舗の営業自粛要請など、外出や行動が制限される生活を国民は余儀なくされ、この状況は2023年春まで続くことになる。

当然のことながら、学校関係は対面授業ができなくなり、佐賀大学もその例外ではなかった。2020年4月直後は通学すらほとんどできず、4月20日になってオンラインでの前期の授業が開始された。そのために北原を含むこの年の新生は同級生の名前も顔もほぼ知らない状況が続くこととなり、大学生は家庭に引き籠もる学生生活を余儀なくされた。

その頃、北原は大学に通学できないために地元の鹿島にとどまり、高校時代の友人と四六時中つるむことになる。それが後に北原と共に起業することになる3人だった。彼らもそれぞれ違う大学に進学していたが、通学できないために鹿島にいたのである。

三枝功伸は北原と同じサッカー部出身で、名桜大学経営学部に入學。永石恒陽はテニス部に所属していて、広島大学教育学部に入學。山口俊平は野球部で、北九州大学経済学部に入學していた。

やがて4人は共同生活を始め、とにかくずっと顔を突き合わせてさまざまな話をしていた。そのうち、単純にずっと一緒にいたので、そのまま社会人になっても一緒に活動することを考えた一方で、4人同じ会社に入るといのは現実的ではないとも考えていた。すると、今後も一緒に活動するには起業しかないのではないかと三枝が言い出した。北原は両親と同じように教員になることも考えていたが、彼らと共に今後も居続けることができること、そして起業というものにも興味を持ち、賛成した。